

その瞳に映る世界

竹鶴永寿

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

5年前。一人の少年は自分の生まれた町で『大火災』に巻き込まれ、死にかけて。少年は考えた。

——誰か助けてくれないだろうか

叶う筈の無い願望。しかし、彼の前に正体不明の『ナニカ』が現れ、『力』を授け、消えた。

これは、少年から『少女』になり、『精霊』となった物語。

目次

始まりの日	1
前兆	3
自称精霊転校生	5
転校生の本性	9
虚構の悪夢——前編	14
虚構の悪夢——中編	23

始まりの日

——地獄を見た。

燃え盛る炎。赤く染まる家々。

——地獄を見た。

肉が焼け焦げる不快な臭い。濃密な鉄の臭い。

狭まる視界と、夜を迎えて尚紅い空。

——地獄を見た。

周囲から響く呻き声、誰かの悲鳴。

見える景色が、自分が仰向けで倒れていることを示していた。起き上がろうとすると、右足に激痛が走った。少しずつ視線を自分の右足に向けてみた。ああ、動けない訳だ。俺の足は、倒壊した家屋に挟まっていた。取り敢えず、できる限りで足を挟んでいる角材とか、その他諸々の瓦礫を退けた。それでも、足は抜けない。折れている訳ではないのだが、抜けないのだ。

どうやら、今退かそうとしているのが、俺の足が挟まった原因の瓦礫のようだった。

どれだけの時間が経っただろうか、煙を吸いすぎたのだろうか、体が動かない。そのまま仰向けに倒れた。自分の荒い息づかいと、早鐘を打つ心音が、やけによく聞こえた。体に力が入らない。周りは今も燃えている筈なのに、肌を焼く程に熱い筈なのに、徐々に意識が曖昧になり、体は感覚を失い、冷えていく。

——誰か、助けてくれないだろうか。

絶望的状况の中で考えたのは、そんなあり得ない願望。

——誰でもいい。なんでもする。だから——

（——助けを求める君。無力な君。ねえ、この絶望を覆す力が欲しくはない？世界を助ける為の、世界を変革出来るほどの力が、欲しくはない？）

もう、何も見えないけれど、その言葉は確りと俺の耳に届いた。

「だ……れ？」

渴いた喉で、言葉を紡ぐ。

（誰か？なんて、今はどうでもいいと思わない？ただ、私は君に力を与えられる。この地獄を生き延び、未来を手にする為の力を、ね）

どうだい？と、その『誰か』は俺に再度聞いてくる。

聞かれている。今ここで焼かれて死ぬか、その『力』を得て生き延びるか。答えなんて、決まっている。ただ、このまま焼かれて死ぬのは御免だ。

「くだ……さい、その、……『力』」

（承ったよ。君がこれから、その力で何を成すのか、楽しみにしているよ）

薄れ行く意識の中、暖かい何かが、俺の中へ入ってくるのを感じた。何が起きたか分からなかった。ただ、もう一度頑張ってみようと思った。生き延びるために、腕を突っ張って足を挟んでいると思われる最後の瓦礫を退かし始めた。必死だった。無事な左足で瓦礫を足の突っ張りも加えて退けようと試みたり、そうしていると、ついに最後の瓦礫が足から退いた。俺は、痛い足を引きずり、安全だと思われる方向に、進み続けた。

これは、俺が俺であった最期の記憶。そして、俺が私になった始まりの日

前兆

目覚めは、最悪だった。今でも臍げにだけど覚えている。5年前の大火災の日の夢。『私』が、『俺』だった時の夢。

「……最悪です」

朝から嫌な夢を見た。快眠できたという訳でも無いが、二度寝をする時間もない。今日は学校がある。取り敢えず、寝汗で貼り付く前髪の不快感を無くすため、手短にシャワーを浴びた。

「……………」

脱衣所の鏡に映る自分の姿を見て、いつも顔が引き攣る。

腰まで届く黒髪。同じく黒い瞳。肌は白く、手足は華奢で、背丈も4月の身体検査の時の記録では154cmだった。別に「私可愛い！」とか思っただけでベラベラと自分の容姿を語った訳ではない。私は元々『男』で、今、鏡に映るような慎ましやかな胸も無ければ、下半身にあった筈の部位が足りないなんて事も、本来ならあり得ない。

全てはあの日。5年前の『誰か』に貰った『力』とやらに起因していると思っただけ。必死で逃げて、次に気が付いた時には病院のベッドの上で、この姿になっていた。あの時貰った『力』は、この5年間で未だに発現した事もないが、去年から私も高校生になつて、今は『都立来禅高校』に2年生として通っている。

「今…… 何時でしょう?」

我に返って時計を見た。この瞬間、私の遅刻が決定した。

別段面白い事も無い学校が終わった。突然の空間震警報で避難した4月10日の空間震以来、学校からシエルターに行くというような事もない。思い返してみればあの日、同じクラスの男子が避難の混乱に乗じて何処かへ行くのを見た。シエルターで気になつて担任の岡峰珠恵先生。通称『タマちゃん』と呼ばれるどう見ても私達と同年代にしか見えない小柄で童顔の先生に確認すると、あの時何処かへ行つてしまった生徒は、『五河士道』という生徒らしい。ちゃんとシエルターに着けたか気になつて探したが、彼の姿は何処にも無かつた。

あの日から、私は彼をそれとなく観察する毎日を送っている。別に

惚れたなんて訳じゃない。ただ興味を持った。あの日シエルターに居なかった彼。誰にも気付かれず、気付いたら最初から居たかのように戻っていた彼。でも、私の『目』は誤魔化せない。私は彼を気付かれない様に遠くから眺めるのが癖になっていた。

気付いたら家の前に居た。取り敢えず家に入り、着替えて一通りの家事を片付ける。5年前の大火災の日に女になった私は、奇跡的に生き残った親や遠縁の親戚を頼ることも出来ず、施設に居たので。衣、食、住は確りあった。高校に入ると同時に今のマンションに移り、一人暮らしを始めている。家の事も、家事も終わり、後は寝るだけとなった時、私はいつも目薬を指す。最近目は乾燥するのか、目薬を指す頻度も上がっている。特に病気という訳でもないのが、少し気持ち悪いとおもってしまう。

——夢を見た。

暗闇の中。誰かが私に向けてただただ、微笑みかけている夢。暗かったけれど、それが女性だということ、そして、誰かに似ていた事を覚えている。

「後少しですよ。『貴女』は『私』で『私』は『貴女』。『力』の発現はもうすぐです。…ふふっ」

そして、その女性の『瞳』は、燃えるように紅かった。

自称精霊転校生

6月5日、月曜日の朝。

「……………」

私は朝から少々苛立っていた。最近、寝付けないのだ。理由の7割程は最近よく見る夢の内容だった。別段悪夢という訳ではない。ただ、毎回同じ夢であることが、不気味だった。大抵は毎回同じ女性が私に微笑みかけ、一方的に何かを言いつて終わるのだ。ただ、一度だけ少し夢の内容が変わった時がある。暗闇の中、女性が現れ、微笑みかける。ここまでは同じ。本来ならここで夢は覚めるのがいつものパターンだった。だが、そのまま夢は続き、女性が近くに歩いてくる。そのまま、右手で私の頬を包み、頬をなぞるようにその細い指を這わせた後、手品のように、私の『瞳』を『取り出した』。痛みは無くても、ただ、何事もなくその光景を私は眺めた。その女性は、自分の右の紅い『瞳』も同様に取り出し、私の『瞳』を嵌め込んで、数秒ほど瞼を閉じると、私の『瞳』は定着したようだった。女性は私を見て微笑み、自分の紅い『瞳』を、私の右目に同様に嵌め込んで、そのまま消えた。その夢を見た日から、時々右目が痛む。夜を徹して踞り、痛みに堪え、眠れない。それが残りの3割だった。苛立っていることが周りに伝わっているのか、私の近くの席の者は皆、SHRの直前に帰ってきた。だからだろうか、私が『それ』を知ったのはSHR時、担任の岡峰先生が転校生が来たことを伝えたときだった。

「わたくし、精霊ですよ」

この瞬間。教室から一瞬、音が消えた。転校生が女と知り、舞い上がって歓声を上げていた男子も、それを呆れと侮蔑の入り交じった目で見つめる女子も、皆一様に怪訝な顔を浮かべていた。無論、私もその皆の例に漏れず、ああ、ちよつとイタイ子なんだ。と、思った。黒髪を二つに結わえ、肌は真珠のように白く滑らかで、襟元から覗く首は、少し力を入れて握れば折れてしまうのではないか、と思える程に細い。顔は恐ろしく端正な顔立ちをしている。しかし、前髪が異様に長く、顔の左半分を覆い隠してしまっている。私は転校生を見るのを

止め、黒板に視線を移した。そこには、白いチョークで彼女の名前が書かれている。

『時崎狂三』。とても綺麗で、魅惑的な、少しイタい子。

ふと、五河士道君が、どんなリアクションをしているのか気になった。彼は私の学園生活において、退屈を忘れさせてくれる。最近では、周りに転校生の『夜刀神十香』、優等生の『鳶一折紙』が居るため、横目で少し観察しようにも、鳶一さんが私が見るとすぐに此方を向くので、まともに観察出来ないのだ。しかし、横目で恐る恐る見ると、三人とも固まっていた。女子の二人はそれでも割と普段通りに見えるのだが、中心の五河士道だけが、冷や汗を流し、肩が震えていた。

「え……ええと……はい！とつても個性的な自己紹介でしたね！」

時崎さんがそれ以上何も言わないのを確認し、岡峰先生は終了を示した。

「それじゃあ時崎さん、空いている席に座ってくださいですか？」

「ええ。でも、その前に、一つお願いがあるのですけれど」

「ん？なんですか？」

岡峰先生がそう言うと、時崎さんは指を一本立ててあごに当てた。

「わたくし、転校してきたばかりでこの学校のことをよくわかりませんの。放課後にでも構いませんから、誰かに案内していただきたいのですけれど」

「あ、なるほど。そうですね……じゃあクラス委員の——」

時崎さんは先生の言葉の途中で歩きだし、五河士道の席の前で止まった。

「ねえ——お願いできませんこと？士道さん」

「お、俺……う？ていいうかなんで名前を——」

「駄目ですの……？」

時崎さんはさも悲しそうな顔をした。ああ、あれは断れないだろうなあ……と、私でも思った。

「い、いや、そんなことは……」

「じゃあ決まりですわね。よろしくお願いしますわ、士道さん」

私は思った。

——ああ、彼女は男を手玉にとる悪女だろう、と。

時崎さんは微笑むと、クラスメートの視線の中、軽やかな足取りで指定された席に歩いていった。

——私の隣の席に。

別段その日は転校生が来たことを除けば何か有るわけではなく、時崎さんは転校生らしく、休み時間、昼休みの両方の時間をクラスの質問攻めにあっていた。だから、私は話していない。朝の発言には、少なからず興味を引かれるので個人的に話してみたいのだが、別段今聞く事でもない。

帰りのホームルーム中。岡峰先生の連絡事項を伝える合間、時崎さんは隙について五河君に視線を送り、小さく手を振っている。五河君も五河君で、両隣の二人からの冷たい視線を受けながら、苦笑混じりに律儀に振り返っている。割と本気で彼の胃に穴があくのではないかと思っていると、岡峰先生の話が終わった。

「連絡事項はこんなところですかね。——あ、それと、最近この周辺で、失踪事件が頻発しているそうです。皆さん、出来るだけ複数人で、暗くなる前におうちに帰るようにしてくださいね」

今朝のニュースで聞いていた。天宮市の名前が出ていたので、男だった自分ならまだしも、女になった自分では、拐われても何も出来ないかもしれないと思い、朝から気分が沈んだのを覚えている。

下校時刻。私はやることがない。部活をしている訳ではないので、少し五河君と時崎さんを追いかけるのも良いかもしれない。そう思つて、五河君の方を見ると、何かを耳に入れるような動作をしている。少し、気になった。

時崎さんが五河君の肩をつついて五河君が驚き声を上げた。その声以外は、私の席では聞き取り難いので、先に教室を出ておいた。暫くすると、二人が出てきた。さて、耳に何を入れたのかだけでも、確認しましょうか。

転校生の本性

五河君達が教室から出てきて学校案内が始まった。構図的には五河君が窓側で時崎さんが教室側を歩いている。私は目が良いので、少し遠くからその様子を見ている。何か面白いことでもあれば良いのだけれど、あの二人全く会話してないし、時崎さんなんて五河君見つけてるだけだ。それに気付いた五河君が何か言ったみたいだけど、何故彼は顔を赤く染めて忙しなく顔を触っているのだろうか？後、時々時崎さんから見ええない様に彼女には見えない方の耳を突いたりしているのは何故か。

「何か入れたのはそちらの耳でしたか」

私は彼が耳に何を入れたのかが知りたい。幸い私は目が良い。耳に入れたものが時崎さんが居る側とは違うのであれば、私は向かいの校舎から五河君の耳を見れば、何が入っているのか分かる。

何故私は他人のイチャコラを見せられなければならないのか……。

だって、おかしいよ。私見てたけどなんで時崎さんが階段で五河君に見えるようにスカート焦らしながら捲ってるの？そしてなんで五河君は止めるためとはいえ時崎さんのスカート握ったの？あんなの仲の良い人達のやり取りじゃない。

「……リア充、爆発四散して欲しいです」

もう見たくない。私はお腹一杯です。後は若い二人でどうぞ。

私が目的も忘れかけて帰ろうとした時、見えた。赤い耳に詰められた機械。あれは多分、インカムだと思う。いや、私が知っているインカムより小さいけれど、昨今の科学の発展には凄まじいものがある。軽量化されて小型化していてもおかしくはない。ただ、ならば何故彼は今それを着けている？

ああ、簡単だ。『何処か』に居る『誰か』と話している。

他人を学校案内している最中に失礼だとは思うけれど、私には関係ない。けれど――

「貴方は私を飽きさせないですね」

彼への興味は深まるのだ。彼が何を成そうとしているのか。私は

見届けたいと思った。取り敢えず、目的は果たした。後は帰るだけだ。向こうでは私と同じ様に後を追っていた鳶一さんと夜刀神が見つかったようだ。まあ、彼女達は割と近くで見えていたようだし、見つかるのも仕方ないですね。そう思って、私は一階の昇降口に向かい始めた。

「——ッ!!」

そして私は、とてつもない寒気を感じた。何か得体の知れないものに首筋を掴まれたような、本能的に触れてはいけないと思えるようなナニかに、私は一瞬囚われた。でも、そんなのは一瞬で、夏服の下で出た冷や汗も、すぐに引いていった。私はまた、昇降口に歩きだした。翌日、いつも通りに登校したら時崎さんが遅れてきた。

「もう、時崎さん。遅刻ですよ」

「申し訳ありませんわ。登校中に少し気分が悪くなってしまいましたの」

「え?だ、大丈夫ですか?保健室行きます……?」

「あら、よろしいんでしょうか?わたくし、遅刻してしまいましたし……」

申し訳なさそうな顔で言う時崎さん。

「だ、大丈夫ですよ。じゃあ、保健委員の——」

「付き添いお願いできませんこと?ねえ、『速水京子』さん?」

「……………えっ?わ、私ですか?」

時崎さんが指名したのは私だった。

「だめ、ですよ?」

ああ、まただ。五河君もこれを受けて学校案内を快諾したんだっ
た。

「……………分かりました」

私と時崎さんは、教室を出て保健室に向かう。その過程で会話は無いのだけれど、後ろを付いてくる時崎さんが私を見る。その割に話したいという訳ではないようで、沈黙を貫いている。

「っ、着きましたよ」

やっと保健室だ。後は彼女を常駐する保健の先生に預けて私は教

室に戻るだけ。そう思って、保健室のドアを開けた。でも、誰も居ないようだった。

「あらあら、誰も居ませんわね」

保健室の中を見回している時崎さんに声をかける。

「じゃあ、私は教室に戻ります。常駐する保険の先生が来たら、事情を説明して休ませてもらってください」

「あらあら、つれないことを言わないでくださいまし。少し速水さんと。いえ、『京子さん』とお話がしたいですわ」

この後私は後悔する。この時少し残るなんて言わなければ、私の人生は、もう少しまともになったのだから。

「ねえ、京子さん。わたくし、貴女に興味がありますの」

「……興味、ですか？」

「ええ、ええ。昨日、わたくしが土道さんに頼んで学校案内をしていただいたのは知っていますわよね？」

「……知ってますよ。教室で名指しまでして頼んでたんですから」

あらあら、恥ずかしいですわ。なんて言いながら時崎さんは話を続ける。

「あの時、わたくし達を追いかけていた方々が居ましたの」

この時、私は少しゾツとした。まさか、バレているのではないか。そんな考えが浮かぶ。

「ええ、ええ。居ましたわ。分かりやすく追いかけてくる方が二人。そして、——遠くから覗く方が一人」

私は、それを聞いた瞬間。背筋に昨日と同じ様な悪寒が走った。

「ねえ、京子さん。貴女、『目』がとってもよろしいんですね」

私は無意識に立ち上がり、気付けば壁を背にして時崎さんに詰め寄られていた。

「……………」

何かを言いたいのだが、何も言えない。時崎さんは私に手を伸ばし、脛を沿うように指を這わせた。

「貴女は、何が……………」

「うふふ、一度学校というものに通ってみたかった、というのも嘘では

「ごじいませんのようでも、そうですね、一番となるのはやはり——」
そこで一拍おき、顔を互いの息がかかるくらいの距離まで近づけてくる。

「——土道さん、ですわね」

「——ッ!!」

私の反応を見て、時崎さんはその笑みを深くする。

「彼は素敵ですわ。彼は最高ですわ。彼は本当に——美味しそうですわ。ああ、ああ、焦がれますわ。焦がれますわ。わたくしは彼が欲しい。彼の力が欲しい。彼を手に入れるために、彼と一つになるために、この学校に来たのですわ」

時崎さんの言っている事が理解できなかつた。美味しそう。というのは、言葉通りに受けとるのなら、彼の貞操が危ない。まさか食べるなんて事をするはずがない。そして、『彼の力』とは？私のように、彼も何かしらの『力』を得ているのだろうか？考えても、私には分からなかつた。

「京子さん。速水、京子さん。あなたも——素晴らしいですわよ。土道さんと同じぐらい、美味しそうですわ。ああ、たまりませんわ。たまりませんわ。今すぐにでも食べてしまいたい」

こ、この子は両刀なんだろうか？

頬を上気させ、息づかいを荒くしながら、左手を胸元に這わせ、右手で足をなぞって、スカートの中をまさぐりだした。

「……や、やめてください」

「ふふ、そうつれないことをおっしゃらないでくださいまし」

そう言つて、私の頬に長い舌で唾液の線を引く。自分の長い黒髪が、濡れた部分に貼り付いて気持ち悪かった。

「ああ、ああ、でも駄目ですわ。駄目ですわ。とてもとても惜しいですけど、お楽しみはあとにとつておこなくはいけませんわ」

時崎さんが大仰に首を振り、私の首筋に口づけを残し、身体を離していった。

「貴女は、土道さんの後に。——ゆつくりといただきますわ」

そう言つて、時崎さんは踵を返して保健室から出ていった。後に残

された私は力なく壁に寄りかかり、やがてその場に座り込んだ。
その後保健の先生が来て、私は早退させてもらった。

虚構の悪夢——前編——

私が早退した次の日は来禅高校の開校記念日で休みだった。私は外に出るでもなく、自宅に籠っていた。思い出されるのは保健室での事。

とても恐ろしかった。時崎さんが言っている事の意味が、私は半分も理解できなかった。彼女は言った。

私は五河士道の後でいただく。

焦がれるほどに彼を求め、欲する理由を、私は知らない。そして時崎さんは、私も彼と『同じぐらい』だと言った。この時点で、時崎さんが彼と私を求める理由を色恋である。と、断定することは出来なくなった。それに、考えても分からない事をいくら考えても、答えなんて出るはずもない。私は、この問題を考えることを止めた。

次の日の朝。いつも通りに登校した私。時崎さんから何か言われたりするのではないかと、警戒していた。でも、そんなことは無かった。彼女と話したのは朝の挨拶ぐらいで、それ以降は何も無かった。

放課後。私はすぐに帰る事にした。教室に残って駄弁る生徒、足早に部活に向かう生徒の間を脱け、私は一階の昇降口を目指して歩き出した。

変化は、突然だった。周囲が少し暗くなったと感じたときには私の視界には学校のコンクリートの床が迫っていた。気付けば倒れていた。周りに居た生徒達も私と同じで、皆一様に床に倒れていた。この異常な状況の中、薄れゆく意識の片隅で私は思う。

ああ、前にもこんなこと、あったな。

思い出すのは5年前。薄れゆく意識の中、誰かに助けを求めたあの日。あの、最悪の日。

今度もまた、求めてみようか。よく分からないこの状況を、変えられるかも知れない。そう思いつつ、私の意識は薄れていった。

夢を見ていた。それが夢だと即座に気づけるほどに異質な夢。何もない広野に、『鍵』が刺さっている。『鍵』の全長は1m程だろうか。

上を見上げれば『月』があり、広野を月明かりで照らしている。ふと気付いた。自分の周りに人がいた。皆が皆月を見上げ、月に手を伸ばす。しかし、次の瞬間皆が皆地面に倒れ伏す。そんな、異質な夢。気付いたところで私には、この異常な光景を見続けることしか出来ない。月に手を伸ばす人々が何度目か分からない地面に倒れるのを見たとき、変化が訪れた。全てが黒く塗り潰された。もう、上を見上げても何も見えない。

『私』のために、こんにちわ。貴女のために、久しぶり」

背後から声がした。時々見る夢で聞く声だ。私は振り返って、彼女を見た。いつも見る夢と変わらず、彼女は私に微笑みかけていた。

「そろそろです。貴女は『私』を扱える。『力』を得る。次に目覚めたら呼んでください。『力』はそれに、応えるんです」

今回の夢も、少しパターンが違うようだ。ただ、私は彼女の言葉を聞き続ける。

「目覚めたら、呼んで下さい。『————』と」

その言葉を最後に、夢は覚める。

時は少し戻る。時崎狂三と五河士道。二人が屋上で、対した時。

「狂三……おまえ、一体何をしたんだ!?!何なんだ、この結果は……!」
士道の反応が楽しくて仕方ないといった様子で、時崎狂三はいつもの笑みを濃くする。

「うふふ、素敵でしょう?これはへ時喰みの城。わたくしの影を踏んでいる方の『時間』を吸い上げる結界ですわ」

「時間を……吸い上げる……?」

士道が怪訝そうに言うと、狂三はくすくす笑いながらゆっくりと歩み寄った。そして、優雅な仕草で髪をかき上げる。初めて露になった常に前髪で隠れていた左目。

「な……」

それを見て、士道は眉をひそめる。

その左目は、異様だった。無機質な金色。逆に動き続ける針。針が示すのは数字。狂三の左目を一言で言い換えるなら、時計だった。

「それは——」

「ふふ、これはわたくしの『時間』ですの。命——寿命と言い換えても構いませんわ」

言いながら、彼女はその場でターンする。

「わたくしの天使は、それはそれは素晴らしい力を持つていますけれど……その代わりに、ひどく代償が大きいのですわ。一度力を使うたびに、膨大なわたくしの『時間』を喰っていきますの。だから——時折こうして外から補充することにしておりますのよ」

「な……っ」

その言葉に、士道は戦慄した。

彼女の言葉が本当ならば、今結界の中で倒れている人達は今、狂三に残りの命を吸い上げられていることになる。

狂三は士道の表情を見ると、なぜか、少し寂しそうな顔をした。だがすぐにその顔に凄絶な笑みを貼り付けると、指先で士道のあごを持ち上げる。

「精霊と人間の関係性なんて、そんなものですよ。皆さん、哀れで可愛いわたくしの餌。それ以上でもそれ以下でもありませんわ」

士道を挑発するように眉を歪め、続ける。

「ああ——でも、でも、士道さん。あなたは——あなたたちは、特別ですわ」

狂三が士道から少し距離をとり、指を鳴らす。すると背後で、屋上に何かが倒れる音が響いた。士道は恐る恐る、背後に視線を向けた。そこには、クラスメートの少女『速水京子』が倒れていた。

「……な、なんで……」

士道はあまりにも予想外な人物の登場に驚いている。

「彼女もまた、『特別』ですわ。士道さんと同じ。わたくしが直接『食べる』に値する存在」

士道は考えた。自分には、精霊の力を『封印』する力がある。しかし、目の前で横たわる意識なき少女が、狂三にとっての『特別』である。というようには、全く思えなかった。

「俺には、お前の目的が分からないよ……狂三」

「……全ては、わたくしの悲願のために。士道さんと京子さんには申し訳ないのですけれど」

俺は、狂三を止めるためにここへ来た。真那にこれ以上狂三を殺させないために。狂三にこれ以上、人を殺させないために来たんだ。

「俺は、お前を止める。もう、お前に人を殺させない。もう、真那にお前を殺させない」

「ありがた迷惑ですわ。それに、士道さん？ 貴方、自分の立場をお分かりですか？」

「ああ、分かっているさ」

「なら、今朝の言葉を撤回してくださいまし。もう口にしないと約束してくださいまし。そうしたなら、この結界も解いて差し上げても構いませんわよ？ わたくしとしても、もともとわたくしの目的は貴方がたお二人なのですもの」

「な……」

来禅高校の中に居る人達全員が今、目の前の少女に人質として利用されている。今朝の言葉を撤回するだけ、それだけでいい。何も難しい事じゃない。選択の余地は無かった。意を決して、口を開く。

「……結界を、解いてくれ」

それを聞き、狂三が息を吐く。まるで、安堵したかのように。

「なら、言ってくださいまし。もうわたくしを救うだなんて言わないと」

狂三は撤回を促す。

「それは……できない」

「は——？」

士道のその言葉を聞き、狂三は一瞬、何を言われたか理解でき無かった。

「……あら、あら、あら？」

その言葉の意味を理解出来てくると、狂三は顔を不機嫌そうに曇らせる。

「聞こえませんでしたの？ それを撤回しない限り、わたくしは結界を解きませんわよ」

「……っ、それは、解いてくれ、今すぐ!」
「なら」

「でも、駄目だ!俺はその言葉を撤回できない!」
それを撤回してしまつたら、もう、土道は時崎狂三を助けられなくなる。何も変えられない。

「——聞き分けのない方は嫌いですわ……ッ!」

狂三は軽やかにバックステップで土道と距離をとり、右腕を頭上に掲げる。

——瞬間。けたたましくなり始める警報。

「——っ、空間震警報……ッ!」

顔が歪む。嫌というほどに聞き慣れたそれは、この世界を蝕む突発性災害——空間震の発生を知らせるものだった。

「きひ、きひひ、きひひひひひひひひひひッ、さあさ、どおうしますの?今の状態で空間震が起こつたなら、結界内にいる方々は一体どうなりますでしょうねえ」

「……!」

言われて、土道は言葉を失つた。しかし、疑問が浮かんだ。なぜ、狂三はそんなにも、土道に言葉を撤回させようとするのだろう。だって、それはそうだ。土道が何を言おうが、言葉は言葉。狂三の目的が自分と、後ろで意識を失っている彼女を『食べる』ことだというのなら、そんな言葉に構わず、目的を果たせばいい。なのに、なぜ、そこまで気にするのだろうか。その時、耳に付けたインカムが、土道の鼓膜を震わせる。逆転の発想。

五河土道は屋上に備え付けられたフェンスの方に歩き出す。そして、フェンスをよじ登り始めた。登り終わると、狂三の方に向き直る。「空間震を止めろ、狂三。さもないと——俺は、ここから落ちて死んでやるぞ……!」

「は……はあ……っ!」

さすがに予想外だったのか、狂三が素っ頓狂な声を上げる。

「な、何を仰いますの……?気でも触れまして?」

「悪いが正気だ。やっぱり俺は、朝の言葉を引つ込められない。——それじゃあ、お前を助けられなくなっちゃう」

狂三が、不快そうに顔を歪めるが、士道は構わず口を開いた。

「でも、おまえに空間震を起こさせるわけにはいかない。だから——」
「それで自分を人質に？短絡的にも程がありますわ。追いつめられた逃亡者ですよ!？」

言われて、士道は小さく笑ってしまった。

「……そんな脅しが効くとお思いですか？やれるものならやっつてご覧なさいな！」

「……ああ」

士道は静かに言うと、体をフェンスの向こう側に投げ出した。

「——っ！」

しかし、落下の途中、士道の体は何者かによって支えられ、そのまま屋上に戻された。

「お……おう、狂——」

瞬間、士道は乱雑に放られた。投げられる前に見えたのは、自分を抱き抱える狂三の姿だった。

「あ……」

士道は、大きく息を吐いた。

「あつ……たり前ですわ……ッ！」

すると狂三が興奮した様子で声を荒らげた。曰く、何を考えているのか、自分が居なければ死んでいた等々。

「狂三、おまえ、なんで俺を助けてくれたんだ？」

「……っ、それは——あなたに死なれると、わたくしの目的が果たしずらくなるから……」

「そうか。じゃあやつぱり、俺には人質の価値があるんだな？」

「……っ」

「さあ、じゃあ空間震を止めてもらおうか！ついでにこの結界も消してもらおう！さもないと舌を噛んで死ぬぞ！」

「そ、そんな脅し——」

「脅しだと思うか？」

狂三は一瞬悔しそうな顔を作った後、指を鳴らした。すると、周囲に響いていた警報が止み、辺りを被っていた重い空気が霧散する。

「ま——まあ、構いませんわ。どうせもともと、わたくしの狙いは士道さんと京子さんだけなものですもの。何も問題ありませんわ。何も問題ありませんわっ!」

狂三は自分に言い聞かせるかのように叫ぶと、士道の方に向き直る。

「じゃあもう一つ——聞いてもらおうか」

「ま、まだありますの……っ!?!」

狂三が困惑したように言う。

「一度でいい。——狂三。おまえに一度だけ、やり直す機会を与えさせてくれないか」

「え……?」

狂三が驚いたように目を見開き、すぐに眉をひそめた。

「……まだそれを言いますの? いい加減にしてくださいまし。ありがとうございました迷惑ですよ。わたくしは、殺すのも、殺させるのも、大ッ好きですの! あなたにとやかく言われる筋合いなんてどこにもありませんわ!」

士道を拒絶するように、狂三は叫ぶ。

「狂三。おまえ……誰も殺さず、命を狙われずに生活したことって……あるか?」

士道の言葉に、狂三は肩を揺らす。

「……っ、それは……」

「じゃあ、わかんねえじゃねえか。殺し、殺される毎日の方がいいだなんて。もしかしたら——そんな穏やかな生活をおまえも好きになるかもしれないじゃねえか……ッ!」

「でも、そんなこと——」

「出来るんだよ!俺になら!」

士道が叫ぶと、狂三は気圧されたように息を詰まらせた。

「おまえのやって来たことは許される事じゃねえよ。一生かけて償わなきゃならねえ!でも……ッ!おまえがどんなに間違っついていようが、

狂三！俺がおまえを救っちゃいけない理由にはならない……ッ！」
「っ——」

狂三が数歩後ずさり、士道が一步前に踏み出した。

「わ、わたくし……わたくしは——」

狂三は混乱したように目を泳がせ、声を発する。

「士道さん、わたくしは……本当に……っ——」

狂三が何かを言おうとした瞬間。

「——駄ア目、ですわよ。そんな言葉に惑わされちゃあ」

どこからともなく、そんな声が響いた。士道は訝しげに眉をひそめた。その声は——

「ぎ……ッ!?!」

士道の思考を遮るように、前方の狂三が奇妙な声をのどから漏らす。

「狂三……?」

士道は狂三を見て——凍りついた。

「い、あ、あ……」

狂三が、限界まで目を見開き、苦しげな声を響かせている。

視線を下へ。狂三の胸から、一本の赤い手が生えていた。

「え……」

それを見て、ようやく状況を理解した。

いつの間にか何者かが狂三の後方に表れ——狂三の胸を貫いたのだ。

「わ、たく、し、は」

「はいはい。わかりましたわ。ですから——」

狂三の胸から、手が引き抜かれる。瞬間、狂三が纏っていた霊装が空気に溶け消え、彼女の白い肌が露わになった。

「——もう、お休みなさい」

「……いぐッ」

あまりにも小さな断末魔を残し、狂三の身体が人形のようにくずおれる。そして、一度身体が痙攣したように跳ね——それきり、動かなくなった。

「な……」

土道は動けなかった。突然の事に、思考がついていかない。だって、狂三の後ろに立っていたのは。

「あら、あら。いかがいたしましたの、土道さん？ 顔色が優れないようですよ」

——時崎狂三、その人だったのだから。

虚構の悪夢——中編——

「く、るみ……？は？なんで……」

土道は、今まで話していた狂三を見てから、新たに現れた狂三に視線を向けた。それは間違いなく狂三だった。

影のような黒髪も、真珠のような肌も——左目に光る時計も、今までと同じ。ただ、その表情は違った。先ほど倒れた狂三が浮かべたような混乱の表情ではなく、余裕に満ちた妖しい微笑である。

「まったく、この子にも困ったものですわね」

狂三は、先ほどまで倒れ伏す狂三を貫いていた右手を払い、血を飛ばす。すると、狂三の影から無数の手が生え、狂三の死体を影の中に引きずり込んだ。

「あんなに狼狽えて。——まだ、この頃のわたくしは若すぎたかもしれませんわね」

「な——」

「ああ、でも、でも。土道さんのお言葉は素敵でしたわよ？」

冗談めかすように身をくねらせ、狂三が笑う。

土道は、言葉を失っていた。目の前で起こったことが理解できない。今、確かに時崎狂三という存在は土道の前に、二人存在していた。そして、土道と話していた方の狂三が、後から現れた狂三に殺された。そして、影に喰われた。

「何、が……」

土道は呆然と喉から声を漏らす。狂三はそれを聞き、可笑しそうに笑った。

「さあ、さあ。もう間愈っこしいのはやめにいたしましょう」

狂三がそう言った瞬間。土道の足元から手が生え、両足をホールドした。

「うわ……っ!？」

足を捕まれ、土道は堪らず尻餅を突いた。狂三が土道に近づき、その頬に冷たい手を添えた。

「まずわ貴方の力……いただきますわよ、土道さん」

土道の顔が恐怖で歪む。狂三はその笑みをより深くした。しかし、次の瞬間。

「……あら……あら」

狂三は、自分の手を襲う痛みにも、眉をひそめる。そして、身を翻し、後方に跳び退く。

狂三が視線を向ける前に、第三者の声が聞こえた。

「私のために、おはようございます。あなた方のために、はじめまして」

身の丈より大きな鎌を構え、狂三の腕を切り飛ばしたと思われる女が、そこに居た。

時間はほんの少し戻る。

私の目覚めは最悪だった。硬い床。吹き付ける風。そしていつの間にか出来ていた打撲。取り敢えず、ここが何処かを確認するため、視線を巡らせる。すると、自分のいる場所に二人、片方は見知った顔である五河土道。もう一人は、日頃の姿とは異なるが、少し聞こえた声から時崎さんであることを確認した。

「さあ、さあ。もう間怠っこしいのはやめにいたしましょう」

時崎さんがそう言った瞬間。五河君の足に、白い手が絡み付いた。私は一瞬恐怖した。ただ、声が出なかつたのは良かった。しかし、時崎さんが五河君に近づいて行く。私は咄嗟に、先ほど夢でみた事を実行した。私は、呼んだ。とても小さな声だった。

「……『サリエル』」

瞬間。私の体を、光が包み、私に『記憶』が流れ込んで来た。しかしそれを気にすることなく。私は起き上がり、走った。体がとても軽く。考えるより先に体が動いた。先ほど手に入れた記憶は、『力』の使い方だった。それにより得た知識で、自分の手にいつの間にか現れた身の丈程の『鍵』。アンティーク調の所々に小さな装飾を施された鍵。その形を変化させて、身の丈よりも大きな鎌。『大鎌』をつくり、五河君と時崎さんの間の空間目掛けて大鎌を下から振り上げた。

そして、時崎さんの右手が、天高く舞った。

五河士道にとつて、今日の前で起こった現象は自身の思考を一時的に停止してしまうほどの出来事だった。

「怪我はありませんね？五河君」

自分を危機的状况から救ってくれた彼女。先ほどまで意識なく横たわっていた速水京子が、自身の身の丈より大きな鎌を振り上げた姿勢を解きながら聞いてくる。

「……お、おう。大丈夫」

自分を助けたクラスメートの姿を、士道はその視界に入れる。

彼女の体を包むのは来禅高校の女子の夏服ではなく、藍色のビスチェドレス。慎ましやかな胸を包むのはハートカットネックによって華奢な肩と鎖骨が露出したデザイン。スカート部分の裾は右から左に斜めに切られ、細めの右脚が時々その白い肌を覗かせる。胸元やスカートの裾には、白のフリルが施されている。それだけならパーティーにでも行くための服装のだが、首には藍色のチョーカーが巻かれており、小さな南京錠が吊り下げられている。その南京錠と、彼女が手にしている身の丈より大きな得物。内側に付いた刃は、相手を切るのではなく刈るための武器であることを示している。それに、彼女はほんの少し前。その武器でもって、狂三の右腕を切り飛ばし、自分を窮地から救った。

しかし、この状況下において、彼女。速水京子の変容は、ある一つの事実を士道に伝えていた。

彼女。速水京子は——精霊である。ということ。

私は、背後に五河君を庇う形で、此方の様子をうかがっている時崎さんと相對する。

「あら、あら。京子さんですか？随分と素敵な姿になりましたわね」私の姿を見て、時崎さんが言った。

「そうでしたの。わたくしと同じ精霊さんでしたか。けれど、なんのつもりですか？わたくしの邪魔をしないでくださいまし」

「そういう訳にもいきませんよ。私的には、時崎さんが諦めてくれ

の持ちうる能力の中で、絶大な効力を持っている反面、代償も割と大きい。今の私の『鍵のストック』では、使えない。

「さあ、さあ。始めましょう。わたくしの天使を見せて差し上げますわ」

言つて、時崎さんは右手の短銃を掲げる。

「^{ザフキエル}刻々帝^{アルフレフ}」——【一の弾】

先ほどと同じように、『I』文字盤から影が染みだし、時崎さんの握る短銃に吸い込まれた。そしてまた、自身のあごに当て、引き金を引く。

瞬間。時崎さんの姿が掻き消える。私は冷静に、大鎌の石突きで自身のすぐ横を突く。

「——っ!？」

すると、驚愕の表情を浮かべながら、私の突きを躲した時崎さんの姿が、常人でも視認出来る速度になり、追撃をしようと大鎌を横薙ぎに振ると、時崎さんはすんでのところまで身を躲し、給水塔の上まで後退した。

「あ、ありえせんわ！時間を早めたわたくしを最初からとらえるだなんて……」

私は大鎌を自分に立て掛けるように抱え、タネ明かしをする。

「何も不思議なことはないですよ。私は、目がいいので」

タネを明かした後、私も攻める事にした。自身の出せる最速でもって近づき、精霊としての膂力でもって横薙ぎに大鎌を振る。時崎さんは自身の天使の文字盤から長針に当たる銃。歩兵銃を取り外し、私の振るう大鎌の刃の軌道上に両の手の銃をクロスさせ、防御。私の精霊としての腕力は高く無いので押しきれず、競り合いになる。

「ねえ、時崎さん」

私はその状態で語りかける。

時崎さんと私の視線が、重なる。

「——私を見てください」

瞬間。時崎さんは目を押さえて後退した。

「……っ!?!あ、貴女。何をしましたの」

そう言いつつ時崎さんの目は私とは少しズレた場所を見ている。

「ああ、目眩でも起こしましたか」

時崎さんは地面に少し屈み、治まるのを待っているようだ。

「そのまま動かない方が良いでしょう。酷いと吐き気も誘発しますから」

言いつつ私は五河君に近づく。取り敢えず、今のうちに彼を安全な所に連れて行こうとした。——瞬間、私は自分に迫るブレードをとらえた。

間一髪で大鎌を軌道上に滑り込ませ、直撃を防いだ。

「——っ!？」

ブレードを引き、私に蹴りを放つて来た。私が難なく防ぐと、そのまま私の鎌を足場に蹴って距離をとり、五河君の近くに着地した彼女。

「真那!」

五河君の知り合いだろうか？彼がその少女の名前を呼んだ。

「はい。——また、危ねーところでしたね」

よく分からない機械のボディスーツを着た少女が、私の前に立ちはだかった。

「ひさしぶりじゃねーですか、ヘラビリンス」

彼女は、私の『記憶』に刻まれた名で、私を呼んだ。